関連学会印象記

第4回日本心臓血管麻酔学会

外　須美夫*

ついこのあいだ生まれたばかりと思っていた日本心臓血管麻酔学会も第4回目の学術大会を迎えた．開催地も東京に始まり，北海道,横浜と続き，今回は平成11年10月9日と10日の両日，広島市の原爆資料館横の広島国際会議場で行われた．社会保険広島市民病院麻酔・集中治療科主任部長の多田恵一先生が会長を務められ，大学の教室主催とはひと味違った趣向をあちこちに感じさせてくれた．

本学会はもともとこれまでの各種学会のもつ旧体制的虚式的部分をそぎ落とし，新しい形態を模索して発足した経緯がある．若手の委員を中心に学術集会としての実質的な側面を重視し，かつ継続的な内容を盛り込み，また会員の意見を吸収し参考にしながら常に止揚の姿勢を維持し続けることを重要な柱にしている．今回も，この基本路線に則って，仲間意識に支えられた学会であったと思う．

招待講演では，「Megatrialを超えて：虚血性心疾患治療の最前線」を，大阪赤十字病院心臓血管センターの神原啓文先生が，「Perspectives in adult cardiac surgery for 21st century」をメイヨークリニックのSchaff先生がお話しされた．神原先生は，Acute coronary syndromeの発生機序と病態について，アテローム形成から，血小板の活性化，血小板からの各種作動物質放出，凝固カスケード反応など複雑な系の関与と，心筋梗塞への進展について解説された．さらに，Acute coronary syndromeを含めた虚血性心疾患に対する薬物治療について，これまでの大規模試験を踏まえて詳細な検討と説明があった．麻酔科医は，手術室においてはパーシャル循環器科医としての役割を担っている．だから，われわれはつねに最先端の循環器病学を吸収する必要があるし，そういった場が求められている．

シンポジウムのテーマは「心臓手術と脳障害」であり，現在の体外循環下の心臓外科麻酔における大きな未解決問題を取り上げていた．このシンポジウムのために2年間にわたり取り組んできた全国規模のアンケート調査，約1000症例を集めての多施設共同研究の発表があった．内容の新知見はさほどでもなかったが，このような多施設共同研究が組めるところが本学会の真骨頂ともいうべきものだろう．ワークショップは昨年からの継続的なテーマとして「危険な不整脈」「体外循環と止血」「非心臓手術の術前評価と対応」があり，活発な討論が見られた．また，本学会のひとつの特徴でもあり，また継続的に人気を得てもいる経食道心エコーおよび胸壁エコーのワークショップが両日にまたがって開催された．将来はすべての麻酔科医にとって必須知識あるいは基本技術になると思われるエコー検査法について，講師の熱心な解説とデモンストレーションがあり，参加者の好評を得ていた．

また，新しい試みとして，応募された全演題のなかから最優秀の発表を選考し，学会賞としてJSCVA賞が贈られた．全応募演題から上位5演題が事前に選考され，1日目の午前中に最終選考のための口演発表会が行われた．いずれも立派な内容で甲乙つけがたい発表だったが，なかでも熊本中央病院麻酔科の柴田義浩先生他による「冠動脈再建患者における頸動脈狭窄病変」は，周術期脳合併症を減少させるための頸動脈超音波検査の有用性を証明したもので，臨床的価値がとくに評価されてJSCVA賞を受賞した．副賞として来年のアメリカ心臓血管麻酔学会への往復航空券が贈

*北里大学医学部麻酔科

Presented by Medical*Online

られたと聞く．学会2日目の午後には，脳死臓器移植をテーマにした公開シンポジウムが開かれたが，私はその頃，丁度日程が重なっていたアメリカ麻酔学会に出席のため，関西空港へ向かっていた．

学会1日目に山陽新幹線がトンネル壁落下事故により不通になり，演者が来れなかったり，出席者の到着が遅れたりとアクシデントにも見舞われたが，本学会は麻酔の現場からの声を色濃く反映させた学会として大きな実りをもたらしてくれた．

Presented by Medical*Online